

日本の「台湾植民事始」と明治「敗者」史観

北白川宮の表象をめぐって

呉佩珍

✉ peichen@nccu.edu.tw

Currently, the outlook toward the fifty-year period of Japanese rule in Taiwan in Taiwanese studies has been taken from the standpoint of the triumphant group, which represented the Satsuma and Chosun regimes. For this reason, acknowledgement to the ruling Japanese in Taiwanese studies is flat and monotonous, which tended to monopolize and purify modern Japanese nationalism.

Moreover, the literary frameworks constructed by Japanese writers in colonial Taiwan tended to be seen as typical “national literature” subordinated to metropolitan Japan. However, a review of the leading Japanese writers in colonial Taiwan reveals that most were from the northeast of Japan; the defeated group in the Meiji Restoration, or related to them. Besides, we can see from the literary statements of the writers from the defeated group the internalization of the multiple layers and complexities of nationalism. The representative example is the legends of Prince Kitashirakawa, who was seen as the legitimate successor to Emperor Komei, which were broadened and reproduced during the colonial period. Not only the legend of Prince Kitashirakawa but also the “national literature” constructed by the writers of the defeated group differs from the standpoint of the triumphant group behind the Meiji Restoration, which has been taken as the mainstream. Through that contrast, they offered the prospect of renewal in the recently acquired territory of Taiwan.

The purpose of this paper is to examine Japan’s early colonial history in Taiwan, the legends of and writings on Prince Kitashirakawa, and how the writers from the defeated group constructed the “national literature” in colonial Taiwan.

Keywords the early colonial history(植民地初期), the history of the defeated(敗者史観), the Prince of Kitashirakawa(北白川宮), Nishikawa Mitsuru(西川満)

1 はじめに

日本と台湾との近代関係史は、1874年の「台湾出兵」から始まったといえる。「台湾出兵」(または「牡丹社事件」ともいう)の起因は、1871年に琉球の漁船が遭難した際、台湾南部の恒春半島に漂着し、54名の漁師が台湾原住民によって殺害されたことにある。明治維新以後、日本は近代化という目標に邁進し、世界の列強に追いつこうとして、帝国列強の競争ゲームに参加し始めた。「牡丹社事件」が契機となって、前近代以来、中国と日本との間に挟まれながら、かろうじてその主権を保ってきた琉球王国は、主体性が危うくなってきた。その理由に、日本は中国に抗議をしたが、中国は台湾のことを「化外の地」と主張し、積極的に対応しなかった。これによって、日本は「万国公法」に基づき、台湾へ出兵した。これが近代において台湾と日本との最初の遭遇だった¹。また、現実的には「台湾出兵」のもう一つの目的は、明治維新以後、「秩禄処分」によって失業した武士階級の不満を解消するためでもある。実際に「台湾出兵」の前には、「征韓論」という主張もあった。「征韓論」をめぐって、西郷隆盛は明治政府に不満を抱いて、下野して鹿児島に隠遁していた。「台湾出兵」は、さまざまな錯綜する要素が絡んでいたとはいえ、実際に明治政府が西郷隆盛を懐柔するための手段のひとつだったともいわれている。その統帥は弟の西郷従道でありながら、実際に軍隊を統率していたのは西郷隆盛であった²。1874年の台湾出兵以後、土族の不満は解消されるどころか、ますます高まっていき、これが自由民権運動に拍車をかけた。このような情勢のなかで、1877年に日本最後の内戦、「西南戦争」が起こった。その終焉にしたがい、不安な情勢もようやく収束し始めた。1894-1895年の日清戦争、そして1904-1905年の日露戦争では、中国とロシアを破ったと同時に、清国に台湾を割譲させて、日本は最初の植民地を手に入れた。以上述べてきたことは、日本近代に流通している主流の史観から見れば、いわゆる近代史の「通説」である。すなわち、明治維新以後、薩摩藩および長州藩が主導権を握る「勝者」史観でもある。実のところ日台の近代関係史は上述の史観に基づいて書かれており、日本の台湾植民史もこの「勝者」史観により決定され「構築」されている。

「歴史」について、成田龍一がかつて次のように指摘した。「『歴史』とは、国民国家を作り出し、支えていくうえで非常に重要な装置だった」、「だからこそ、歴史学においては、国民国家への批判というものがなかなか入りこめなかったのだ」³。上述からわかるように、歴史学には国民国家への批判がなかなか介入しづらい。冷戦体制が崩壊した後、日本の「旧植民地」から戦前および戦争の責任への追及は、このように歴史の枠組みを支えてきた近代の国民国家への問いかけともなる。これで、国民国家のあり方と歴史の特権性を持っていた歴史学の地位はともに危うくなった。そして、歴史もまた物語で

1 小森陽一『ポストコロニアル』(東京:岩波書店, 2001), pp.23-25.

2 吳佩珍「日本自由民権運動與台湾議會設置請願運動—以蔣渭水〈入獄日記〉中《西郷南洲傳》為中心—」(『國立政治大學台灣文學學報』第12期, 2007.12), pp.109-132.

3 成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか』(東京:ちくま学芸文庫, 2010), p.13.

あるという視点が導入され、隣接領域といわれる文学との関連性が重視されるようになった。このように、文学と歴史との境界が揺らいできて、それによって「歴史」の概念が再定義されていくべきではないか、といわれている⁴。

以上のように、日本におけるいままでの史観への再検討ないし変化を問題意識としてとらえながら、今までの台湾研究に照らし合わせてみれば、台湾を領有していた日本の植民地研究は、主に「勝者」史観から出発したものだと思われる。それにたいして、「敗者」史観から日本の台湾領有期を検討する研究は皆無といってもよい。そのため、日本統治期の植民地者としての「日本」への認識が一枚岩になっているだけでなく、ポストコロニアル的な研究もこのような史観の影響のもとに、日本近代の「ナショナリズム」を単純化する傾向がみてとれる。そのうえ、日本領台期間の在台日本文学者による「文学営為」も、日本宗主国が主体となる「国民文学」の延長としてしか見られてこなかった。しかしながら、植民地期の台湾で活躍していた在台日本文学者を見直せば、東北出身の「敗者」集団に属しているか、あるいは東北にゆかりのある者が多いという事実が発見できる。たとえば、西川満、島田謹二⁵、濱田隼雄⁶などがそれに属している。上記の事実を再確認したうえで、もし「敗者」史観に切り替えて、これらの在台日本文学者の創作、当時における「国民文学」の構想と意欲を考察しなおせば、その構造がより錯綜していて、重層的だとわかる。また、単一的な日本の「ナショナリズム」に回収しきれないこともあきらかになる。台湾を植民地として接収していたとき、日本は、近代国家の基礎がまだ安定しておらず、と同時に「日本」という「国家」のアイデンティティの形成がまだ成熟に達していなかったといえよう⁷。このような特徴も、在台日本文学者集団の発想と作品に現れている混沌、ないし錯綜するナショナルアイデンティティから見てとれる⁸。実際に、それは1895年台湾に上陸した「北白川宮」能久親王―すなわち、幕末に東北奥羽越後藩によって「東武天皇」として擁立された「輪王寺宮」が、台湾で死去した

4 同前。

5 島田謹二は東北帝国大学英文学科出身である。

6 濱田隼雄は東北帝国大学英国文学科出身で、島田謹二の教え子であった。転向問題によって台湾に渡り、その後、女学校の教師になった。日本敗戦後、日本に戻り、その作品は東北の地方新聞と雑誌『河北新報』、『東北文学』などで散見されている。

7 日本の明治維新前後、国家体制ないし国家アイデンティティ問題について、吳叡人が明治維新の「敗者」会津藩の出身者、東海散士柴四朗の『佳人の奇遇』(1879-)を例として、そのなかに描かれている「日本」という国家アイデンティティが混沌していて、あいまいだったと指摘した。吳叡人「日本」とは何か：試論《佳人之奇遇》中重層的國/族想像(黄自進編『近現代日本社会的脱變』, 中央研究院亞太區域研究專題中心, 2006, 12), pp.638-669。1868年(慶應4)年の戊辰戦役は、会津藩が薩長軍と対抗する状態を余儀なく強いられた戦争である。会津藩の家臣の男子が年齢別に組織され、なかでも十六、七歳の男子によって組織された「白虎隊」は、鶴ヶ城が炎上したと誤解したため、飯盛山で集団自殺した。隊士の一人、飯沼貞吉が助かり、「白虎隊」の事跡がその証言によって後世に伝えられた。また、『佳人の奇遇』の作者、東海散士柴四朗が「白虎隊」に編入したものの、高熱が出ていたため、実際の行動には参加できなかった。松本健一「白虎隊士の精神」(歴史讀本編輯部編『カメラが撮られた会津戊辰戦争』(東京：新人物往來社, 2012), pp.44-59。

8 在台日本人作家西川満は、その自伝のなかで、自分の家族の渡台、そして1945年の敗戦によって台湾から引き上げたいきさつを、明治維新の「敗者」史観から描いた。その近代「日本」を構築する観点は、当時日本内地の主流観点と異なっていたことが上記の伝記内容からわかる。西川満『自傳』(東京：人間の星社, 1986), p.2, p.70。

という歴史事実と関係しているのではないかと思われる⁹。

本文の目的は、「敗者」史観より北白川宮能久親王の明治維新史における位置づけをあらためて検証することである。また、台湾征伐途中、病没した北白川宮の「輪王寺宮」時代に焦点を当てながら、1895年北白川宮とともに台湾討伐をした森鷗外が執筆した北白川宮伝記『能久親王事蹟』の親王像を分析し、北白川宮の重層的なイメージを検討する。

2 佐幕敗者から台湾の鎮守神まで—北白川宮の表象変化

日本の台湾「殖民事始」の記録を遡れば、一般的には当時近衛師団団長北白川宮が基隆の澳底に上陸することから始まることになる。『北白川宮能久親王事蹟』によると、北白川宮が1895年5月30日に基隆に上陸し、「嘉義より南進の途中に於て風土病に罹らせ(略)二十二日台南に御入城あらせられたるが、二十八日に至り病勢革り¹⁰」、10月28日に台南駐在所に逝去した。のちに台湾が全面征服され、台湾神社が建てられ、北白川宮を奉り、日本の南方鎮守大社となった。台湾で亡くなった北白川宮は、明治天皇の叔父にあたり、皇族でもあるため、日本の台湾統治の象徴となったことは、表面的にはべつに疑わしいことでもないが、しかしながら、それは主流史観の立場におく見方である。もし、東北史観から明治維新史を改めて検証すれば、いままで明治維新以後、薩摩、長州が主導していた明治政府によって構築された主流史観とは異なる歴史側面が見えてくる。つまり、北白川宮能久親王が、明治維新の際、幕府と朝廷(新政府)との政争に巻き込まれて、一時東北朝廷に擁立され新帝となり、謀反者とみなされた歴史が、再び浮上することになる。

明治維新前後、薩長の西軍と、仙台会津諸藩による奥羽越列藩の東軍が、天皇をめぐる政権の「正当性」を争奪していた歴史が、東北の敗者史観から改めて見直されるようになったのは、1945年以降の戦後である¹¹。戦前においては、大量の史料を駆使し、佐幕派か討幕派に偏らずに公平な立場をとり、幕末維新史を編集、論述した藤原相之助の『仙台戊辰史』が最も代表的な研究である¹²。戦前、北白川宮(幕末の輪王寺宮)がかつて天皇

⁹ 北白川宮能久親王という呼び方は明治維新以後になる。幕末時期に上野東叡山寛永寺の「輪王寺宮」公現法親王と呼ばれ、「輪王寺宮」と通称されている。本文では、明治維新を区切りとしてその呼び名を使いわけるとする。

¹⁰ 台湾教育會『北白川宮能久親王事蹟』(台北：台湾教育会、1937)。のちに『皇族軍人傳記集成 第3巻 北白川宮能久親王』に収録されている。『皇族軍人傳記集成』第3巻 北白川宮能久親王(東京：ゆまに書房、2010.12)、p.155。

¹¹ 長いあいだタブー視されてきた、東北朝廷の新帝擁立説が、戦後に入ってから、ようやく解禁されつつあった。東北朝廷の新帝擁立説を提出した論説は下記のとおりである。瀧川政次郎「知られざる天皇」(『新潮』47-10、1950)、のちに『日本歴史解禁』(東京：創元社、1950[昭和25年])に収録される。武者小路穰「戊辰役の一資料」(『史学雑誌』第61編8号、1953[昭和28])、鎌田永吉「いわゆる大政改元をめぐって」(『秋大史学』14号、1967[昭和42])、藤井徳行「明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(『近代日本史の新研究1』)(東京：北樹出版、1981.10)。薩長の日本近代の主流な「勝者」史観に対して、近來、東北の「敗者」史観も見られるようになった。たとえば、東北相関史料を専門的に紹介している、2004年より歴史春秋社によって創刊された季刊『会津人雑誌』が、日本東北の風土人情のほか、明治維新史を東北視点から、解説ないし解釈しなおす動きがその好例といえよう。

として擁立されたこと、ないし東北朝廷の成立という歴史事実がほとんど言及されてこなかった。この現象は、日本戦前の尊皇主義、天皇の神格化および皇国史観などの思想が歴史解釈権を独占していたことに深く関わっている。日本敗戦後、日本が米軍の支配下におかれて、天皇の「神格化」が崩壊し、天皇の権威も危機に直面していた。長いあいだ、タブー視とされてきたこの幕末政争をめぐる明治維新史の新視点も、このような戦後の状況のなかでようやく解禁された¹³。そのなかで藤井徳行の「明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」が戦後初めて、東北朝廷の新帝擁立言説に対して簡明に整理と分析を行った。

1868(慶應四)年に、幕府の命令を受け京都の治安の維持を担当していた会津藩が、薩摩、長州と武力衝突を起し、これが鳥羽伏見戦争の引き金になった。薩長両藩が牛耳っていた新政府は、戦争が起こってから七日後、仙台藩に会津藩藩主、松平容保を討伐するという命令をくださった。しかしながら、東北諸藩は、新政府軍に対して不満だけでなく、その政権の正当性にも不信感を抱いていた。と同時に、新政府軍の松平容保を死罪に処するという要求は、私怨をはさむ報復行為と思われていた。同年5月3日仙台藩を盟主とする奥羽越列藩が正式に成立したのに対して、薩長の官軍が東北に出兵、討伐した。いわゆる戊辰戦争である。新政府軍が上野の寛永寺を侵攻した際、「輪王寺宮」が擁幕派の彰義隊に守られながら、東北に逃れ、仙台にたどり着いた。その後、東北諸藩によって「東武天皇」として擁立された¹⁴。

「輪王寺宮」公現法親王が東北諸藩によって新帝として擁立された理由はいくつかある。孝明天皇が強硬な攘夷論者であり、慶応二(1866)年まで疱瘡で亡くなるまで、京都守護職を担当していた会津藩には厚い信頼を寄せていた¹⁵。そのため、薩長の官軍に対抗するために、大義名分が必要とされた東北諸藩にとって、孝明天皇の義弟だった「輪王寺宮」が理想的な新帝人選であった¹⁶。

それから、「輪王寺宮」¹⁷が東北で新帝として擁立されたが、それは長いあいだ、幕府

12 藤井徳行「明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手塚豊編『近代日本史の新研究1』東京：北樹出版、1981.10)、p.222。

13 John Dower 'Imperial Democracy : Evading Responsibility,' *Embracing Defeat* (New York : W.W. Norton & Co Inc., 2000), pp.319-345.

14 百瀬明治「奥羽越列藩同盟—その成立から解体まで」(歴史讀本編輯部編『カメラが撮られた会津戊辰戦争』東京：新人物往来社、2012)、pp.6-27。

15 孝明天皇の死因は諸説あり、そのなかで毒殺説が常につきまとっていた。毒殺説について、孝明天皇が公武合体に傾き、開国派に敵愾な態度をとっていたため、倒幕派と見られた岩倉具視一派によって毒殺されたといわれている。伊良子光孝「天脈拝診—孝明天皇拝診日記—」(1)(2)、『医譚』復刊第47-48号)を参照。また、藤井徳行「明治元年所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手塚豊編『近代日本史の新研究』1、東京：北樹出版、1981)を参照。

16 星亮一「奥羽越列藩同盟—東日本政府樹立の夢」(中央公論社、1995.3)、pp.70-71。

17 輪王寺は、元来天海大僧正(1563?-1643)が徳川三代将軍家光に進言し、開山されたもので、徳川将軍家の菩提寺ともなった。その後の公海が日光門主として、後水尾天皇の皇子、尊敬親王を迎え、その初代の輪王寺宮は、為守澄法親王だ。その後、明治維新まで、計十三代十二人の法親王が日光門主「輪王寺宮」になっていた。歴代の日光門主は、幕府が皇族を迎えていた。そのため、「輪王寺宮」が日光宮門主となり、江戸東叡山輪王寺、すなわち上野の寛永寺に駐在していた。北白川宮能久親王が還俗する前、その最後の輪王寺宮であった。菅原信海『日本仏教と神祇信仰』(東京：春秋社、2007)、pp.165-191を参照。輪王寺宮(のち

の伝説とも密接に関係していた。「輪王寺宮」は上野寛永寺の貫主であり、幕府の菩提寺、日光東照宮の奉司者であった。天台宗の天海大僧正が三代將軍の支持を得て、寛永寺を開山した。天海は徳川幕府に次のように献策したと伝えられる。「もしも西国が逆乱があり、今上帝を奪うとなれば、当東叡山の宮門跡をもって当今と仰ぎ、平定の軍を進めざるべからざる」¹⁸。いわゆる「天海秘策」一すなわち幕府の朝廷および西側の大名に対する、謀反防止の対策であった。この「秘策」が幕府内部および箱根より東側の諸藩のあいだで、暗々裏に流布していた¹⁹。それが理由に、代々の「輪王寺宮」は京都より宮門跡を迎えてきた。滝川政次郎はさらに「徳川將軍が『輪王寺宮』を尊崇し、その言に聴いたことは、京都の朝廷以上であつて、日光の宮様即ち東の天子であつたのである。それは丁度日光廟が東の伊勢神廟であり、東照神君が天照大神であつたのと同じである」と指摘した²⁰。「輪王寺宮」が奥羽越列藩に新帝として擁立されたのは、歴史の偶然的な出来事ではないということは、以上の資料によって裏付けられているといえよう。

新政府軍が東北諸藩を鎮めたのち、「輪王寺宮」は投降、謝罪し、京都で閉門自省を命じられた。赦免された後、伏見宮家に復籍し、北白川宮を襲名した²¹。その後、「北白川宮」は明治天皇にドイツ留学を願い出た。だが、留学期間にドイツの貴族女性と婚約したニュースが新聞に報道されたことで、明治天皇を激怒させた。そのため、留学をやむを得ず中断した²²。帰国後、再び京都に謫居を命じられ、自省させられた。その後、近衛局に入り、1895年日清戦争の際、近衛師団長に昇進した。同年5月30日に師団の半分の兵力という守備態勢のまま、台湾に上陸を命じられて、台湾征討を始めた。

日清戦争の際、近衛師団は元来、遼東半島に駐屯していたが、それは、万が一、清国との戦闘が拡大すれば、北京に入り守備することを想定していたからだ。しかしながら、中国の戦況が予想されたように拡大しなかったうえに、清国も講和を提議したため、さっそく1895年5月8日に下関条約を締結したのち、急遽台湾を守備するようにと、

の北白川宮)は、弘化四年生まれ、満宮と命名され、伏見宮邦家親王の第九子である。二歳で仁孝天皇の養子となり、十二歳で「輪王寺宮」の御弟となり、十三歳で江戸の東叡山に入る。『皇族軍人傳記集成』第3巻北白川宮能久親王(東京：ゆまに書房、2010.12)の年譜を参照。

18 藤井徳行「明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手塚豊編『近代日本史の新研究』1, 東京：北樹出版, 1981)第二節「輪王寺宮の制度的意義」, pp.217-231を参照。また、長尾宇迦「東武皇帝」即位事件―最幕末に存在した、歴史に埋もれたもう一人の天皇(『歴史読本』, 2010.8), p.126を参照。

19 長尾宇迦「東武皇帝」即位事件―最幕末に存在した、歴史に埋もれたもう一人の天皇(『歴史読本』, 2010.8), p.126。

20 滝川政次郎「知られざる天皇」(『新潮』47-10, 1950.10), p.124。

21 奥羽越列藩の敗戦後、「輪王寺宮」が「官軍」に謝罪、投降を決意し、執当僧だった義観と堯忍が免職となった。のちに義観が東京乱問司に送られ、尋問調査を受けた。義観がすべての責任を負うことになり、次のように供述した。「春來の事一として(「輪王寺宮」が彰義隊に擁立され、佐幕路線を決定したことを指す)親王の意に出るに非ず、皆野納一人之が計を為したのである」と自分に全責任を課した。のちに義観(覚王院)のこの自白によって「輪王寺宮」が奥羽越列藩同盟の盟主と「東武天皇」になったのは、「輪王寺宮」の本意ではなく、義観の唆だったという。藤井徳行「明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手塚豊編『近代日本史の新研究』1, 東京：北樹出版, 1981), pp.306-308を参照。

22 近來、北白川宮のドイツ留学期間の婚約問題については、浅見雅男「北白川宮能久親王--明治帝を激怒させたドイツ貴族との婚約」(『文藝春秋』, 2011.3), pp.330-332を参照。明治天皇伝記『明治天皇紀』も北白川宮のこの婚約問題に言及している。

命じられた。明治政府はただちに同月10日に樺山資紀を台湾総督に任命し、当時の征清大総督小松宮彰嘉親王は、北白川宮が率いる近衛師団を派遣し、台湾の駐屯軍に当てることを決定した。同月16日に征清総督は、近衛師団に台湾総督の命令、そしてその指揮に従うことを命じ、待機させた。明治期以来、日本皇族が軍職につくようになったため、一般の将校はその階級が皇族出身の軍人より高くても、皇族軍人を任意に指揮することができなかった。もともと守備軍力で遼東半島に駐屯していた近衛師団が、突然守備兵力で台湾に上陸することを命じられ、のちに戦闘体制を余儀なく強いられたこと自体は疑点が多い。と同時に「北白川宮」は皇族として、危険を極める「蛮荒の地」に入り、征伐することも同じく尋常ではなかった。また北白川宮が遼東半島に駐屯した当時、すでにマラリヤにかかっていたといわれている²³。そのため、基隆から上陸し台南で逝去するまで、滞在期間がわずかであったにもかかわらず、その直後、台湾神社の完成によって鎮台の精神的象徴になり、台湾神社の鎮守の神になった²⁴。日本の植民地期において、北白川宮の台湾征戦の事跡が、伝記と伝説という形式を通して、反復、再生されて台湾に流布し、その存在は日本の台湾統治の精神的象徴となった。

3 東北朝廷の天皇擁立説の虚と実—森鷗外『能久親王事跡』にみる北白川宮像

日本の植民地時期における能久親王事蹟の生産と流布は、基本的には1910年代より、親王の台湾征伐に随行していた将校による回顧録という形式から始まり、のちにさまざまなジャンルに広がった。しかしながら、伝記にせよ、教育目的のプロパガンダにせよ、その台湾征伐以前の歴史がほとんど触れられていない。そのかわりに、台湾の滞り期間、つまり、1895年5月30日から10月28日までに焦点が当てられている²⁵。台湾と日本に現存している能久親王の伝記および資料を調査すれば、その「輪王寺宮」時代、つまり「明治維新」の主流史観が強調しているように、かつて佐幕派とともに東北に流されて、実際に「謀反者」として見られた歴史が、ある程度散見されていることがわかる。さらに伝記における北白川宮の台湾討伐の戦役を詳細に検証すれば、疑わしい箇所をいくつか発見できる。幕末における「輪王寺宮」、東北諸藩そして明治政府との政争によってもたらされた錯綜した関係は、北白川宮が台湾征討の歴史に影を落としていると思われる

23 台湾教育會『北白川宮能久親王事蹟』(台北：台湾教育會, 1937), p.20.

24 台湾の碑史では、北白川宮が新竹にたどり着いた際、当地の牛眠山で流弾にあたって死亡したといわれている。日本軍の士気をくじくことになると危惧されたため、逝去した消息を隠蔽した。黄榮洛『北白川宮は新竹で死んだ』(台湾分館所蔵, 1986)を参照。それに対して、日本ないし戦前の台湾において、流布していた北白川宮の伝記は、死因はマラリヤの悪化であり、台湾で逝去したもののその死の消息は極秘とされ、遺体は日本に運ばれて、東京で国葬が行われたとしている。1908年に出版された森鷗外『能久親王事蹟』にそのいきさつが詳細に綴られている。『鷗外全集』第3巻(東京：岩波書店, 1987)を参照。

25 たとえば、台湾教育會が編纂した『北白川宮能久親王事蹟』(台北：台湾教育會, 1937)、および元近衛師団通訳官吉野利喜馬『北白川宮征台始末』(台北：台湾日日新報社, 1923)等。

る。北白川宮が率いる近衛師団が、困惑しながら台湾に上陸し、そして未知な戦闘状態を余儀なく強いられたことは、当時随行していた副官西川虎次郎の回顧よりわかる。「所が、突然台湾守備の命を受けまして、冬服のまま、急遽台湾に赴いたのであります。勿論我々は当時台湾に就いては何等知らず、また戦争を預期するようなことは、全然なかったのであります。運送船は蘇澳沖に集合を命じられ、以後海軍の通報に依り上陸地を定めたのであります、其の時になって漸く我々は、無事平穩に上陸できぬかも知れぬという疑問を抱いたのであります」²⁶。

また、華嚴宗の佛学研究者亀谷天尊(聖馨)は、伝記『北白川宮』のなかで、北白川宮がいかに幕末の政争に巻き込まれたか、そして台湾征討の始末について、それぞれ疑問を提出した²⁷。幕末に薩長両藩が朝廷軍の大義名分を借りて、徳川幕府と東北諸藩を征伐しようとするのは、私怨をはさんで報復する行為であると同時に、幕府の代わりに政権を乗っ取ろうと企んでいることに等しい、と当時奥羽越列藩の動きを上述のように解釈した。東北諸藩は、俎上の魚にだけはなるまいと決心し、一戦を惜しまなかった。そのため、江戸から仙台に逃れた「輪王寺宮」は、奥羽越列藩に盟主と祭り上げられ、薩長両藩が率いる朝廷軍に対抗しうる大義名分となった、と指摘されている。また、その伝記において、北白川宮が守備兵力で台湾を討伐するようにと命じられたことの理不尽、そして台湾総督府への批判という描写からすれば、北白川宮が当時立たされた窮地は想像がつく。その批判内容は下記のとおりである。そのひとつは、近衛師団は元来、北京原野で交戦することを想定していたが、台湾という島国を戦場として考えていなかったため、その険しい山道に対応しうる人夫が不足していたことである。さらに上陸した当時、三日分の食料と二百余発の弾丸しかもちえなかった。それから、台湾総督府は、もはや抗日義勇軍の激しい抵抗ぶりを事前にわかっていたようだった。当時薩長勢力が主導した台湾総督府は、行政組織でありながら、守備隊を指揮する権限を持っていたほか、師団をとこところけん制し、援軍の守備、地理位置そして抗日軍の情報の把握がまったく空白だった、と述べている²⁸。亀谷天尊(聖馨)の『北白川宮』のなかでは、北白川宮が皇族でありながら、台湾征伐を強いられて、最後「新領土」台湾で死亡したということは、北白川宮が台湾総督府にまるで「捨石」のように扱われていたという歴史の「影」を暗喩している。

1896(明治二九)年に北白川宮が率いた近衛師団に随行していた十余名の将校が組んでいた「棠陰会」が成立し、北白川宮の代表的な伝記『能久親王事蹟』は、その尽力によって出版された。森鷗外に執筆の依頼をしたうえ、まず「棠陰会」の会員が手分けして調査し、その資料を整理したのち、同じく近衛師団に属していた鷗外に依頼した。書き上げ

26 西川虎次郎「北白川宮能久親王殿下の御征戦に從ひて」(『台湾』、1936.1)、p.4.

27 亀谷天尊・渡部星峯『北白川宮』(東京：吉川弘文館、1933)。亀谷聖馨は、号が天尊である。大乘仏教の華嚴教理を研究した仏教学者で、同時に東京の名教中学校校長も務め、教育者でもある。『華嚴大経の研究』、『仏陀の最高哲学とカントの哲学』などの著作がある。

28 亀谷天尊・渡部星峯『北白川宮』(吉川弘文館、1933)、pp.82-83.

た後、また会員によって校正が行われ、ようやく1908(明治四一)年に刊行された。森鷗外の『能久親王事蹟』の影響力は、学術論文および歴史小説によって頻繁に引用されていたことからうかがい知れる。同時にこの伝記は日本統治期の台湾において、在日日本人文学者にも大きな影響を与えた²⁹。鷗外に執筆を依頼した理由は、鷗外が日清戦争に参加した後、近衛師団の台湾移動に随行し、台湾討伐にも参加したからである。また、鷗外研究のなかで、鷗外が日清戦争が終了したのち、直ちに緊急に異動させられ、台湾討伐に参加させられたことはずっと疑問視されてきた。鷗外の台湾滞在と動向については、島田謹二の「征台陣中の森鷗外」が詳しい。島田謹二は鷗外の台湾戦役に関わる、たとえば『明治二十七八年日清戦史』、『明治二十七八年役陣中日誌』などの資料を、丹念に調査し、鷗外の確実な滞在期間が1895(明治二八)年5月30日から同年9月27—28日までだと、突き止めた。鷗外の日清戦争および台湾討伐記録の『徂征日記』では、台湾戦役についてほとんどふれられていない。そのかわりに鷗外の台湾上陸および征台戦役への参加記録は1908年出版された『能久親王事蹟』のほうに詳しく綴られている³⁰。また、森鷗外は日清戦争と1895年の台湾上陸および征台戦に参加したとはいえ、台湾について言及しているのは『徂征日記』のほか、北白川宮伝記『能久親王事蹟』が最も多いといえよう³¹。

『能久親王事蹟』において、幕末の「輪王寺宮」時代、とくに東北諸藩によって新帝として擁立され、のちに監禁され自省するようにと命じられていた経緯について、ほとんどあいまいで簡略化された描写しかない。それと対照的なのは、北白川宮が台湾に上陸してから、南に向かって前進していた様子³²の描写である。たとえば、薩長両藩が率いる政府軍が上野寛永寺を攻撃したことによって、上野の「寛永寺」に駐屯して「輪王寺宮」を護衛していた彰義隊は撃退され、榎本武揚が軍艦長鯨丸で羽田湾に「輪王寺宮」を迎えに赴き、宮が東北行を決断したいきさつについて、鷗外は次のように描いている。「東叡山の道場兵燹に罹りて、身を寄すべき処なし。頃日左右に訊るに、皆江戸の危険にして、縦ひ大総督に倚らんも、また安全を期し難かるべきを語れり。よりに暫く乱を奥州に避けて、皇軍の国内を平定せん日を待たんとすと」[下線筆者]³²。この視点は、明らかにこの歴史事実をぼかし、「輪王寺宮」が謀反を起こす意図がないと強調するばかりである。また、「新政府軍=皇軍」という描き方からも、出版当時の明治政府の史観への配慮がうかがいしれる。それに対して、「輪王寺宮」が東北に到着してから、どのように東北諸藩によって新帝として擁立されたかについては、ほとんど言及していない。東北に滞在していた期間についての描写は、主に「輪王寺宮」の側近覚王院義観の視点を通して、「輪王寺宮」がどのように江戸から東北に逃れて奥羽越列藩によって盟主として推挙されたかといういきさつを追っている。主人公の「輪王寺宮」自身の東北に到着した当時の情

29 たとえば、島田謹二「征台陣中の森鷗外」、藤井徳行「明治元年 所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手塚豊編『近代日本史の新研究』1, 東京:北樹出版, 1981), そして吉村昭の歴史小説『彰義隊』(東京:新潮社, 2010)は、『能久親王事蹟』を引用すると同時に、この伝記の影響についてふれている。

30 島田謹二「征台陣中の森鷗外」(『華麗島文学志—日本詩人の台湾体験』東京:明治書院, 1995), pp.65-67.

31 同前掲書, p.94.

32 森鷗外「能久親王事蹟」(『鷗外全集』第3巻, 東京:岩波書店, 1987), p.536.

勢についての意志表現の描写はほとんどないといえよう。それは、奥羽越列藩が組織した公議府が成立したのち、「輪王寺宮」が仙台に到着したと同時に、仙台藩をはじめ諸藩要員は、親王に懇願し、白石城にとどませようとした経過の描写からもうかがえる。「二十三日〔慶応四年六月〕、仙台の朽木五左衛門、横田宦平、会津の小野権之丞(中略)の六人宮に謁して、速に仙台に赴かせ給ひ、白石城を旅館に充てさせ給はんことを請ふ。白石城は当時奥羽列藩の策源にして、公議府と称せり。覚王院答へていはく。仙台に赴かせ給ふ期日は、列藩の合議して給ふことならば、宮必ずやこれに従ひ給はん」³³。この部分の描写は、『会津藩戊辰戦争日誌』とは好対照となっている。『会津藩戊辰戦争日誌』は、鳥羽伏見戦争が勃発した慶応四(1868)年1月から松平容保が東京に送られた10月まで、会津藩を中心として政局の毎日の動向を追う史料である。この史料は、慶応四(1868)年6月16日に「輪王寺宮」が奥羽越列藩同盟盟主になることを承諾し、また、同年6月23日に列藩同盟が公議府の根拠地白石城で盟主「輪王寺宮」を「東武皇帝」として擁立し、年号を大政に改元したと記録している。東北朝廷の体制が確立したと同時に、新政府との敵対態勢も明らかになった³⁴。この「輪王寺宮」の東北時代の描写を照らし合わせてみれば、鷗外がその「謀反」した歴史事実を極力回避していることがわかる。それは、「輪王寺宮」が佐幕側の東北諸藩と結託して、とうとう「新帝」として擁立されたという一連の出来事を、すべて宮の側近、覚王院義親によるもののように描写されていることから読み取れる³⁵。また北白川宮が台湾の灣底に上陸してから、台南で亡くなるまでの征战ぶりを詳細に記録していることと比べてみれば、「輪王寺宮」時代と「北白川宮」時代のそれぞれの描写の差異は一目瞭然である。その描写からもわかるように、鷗外が「輪王寺宮」時代の「謀反」歴史に対して、明治維新以後の主流の「勝者」史観をはばかりながら、「敗者」側の悲願に鑑みて「英雄」としての北白川宮像を仕上げようと苦心している痕跡がみてとれる。

鷗外が台湾征战を詳細に描いていることは、鷗外が自らこの戦役に参加したことと無関係ではない。鷗外は、近衛師団に従って台湾に上陸し台湾討伐戦役に参加し、『徂征日記』にその征战記録を残している。そのため、能久親王が逝去したのち、その旧部下の懇願によって鷗外が数年間を費やして『能久親王事蹟』を執筆した。このなかで、近衛師団は在台的征战経過を詳細に記述している。それに対して、『徂征日記』ではあまり言及していない。鷗外の『能久親王事蹟』は、おもに北白川宮の台湾征战の英雄的な事跡を顕彰するためにあり、その台湾征战の功績のほか、鎮守神としての正当性を強調するのが目的と思われる。そのため、「輪王寺宮」がかつて明治天皇に反旗を翻した歴史的記憶をなるべく希薄化、ないし抹消しようとした。その「反逆」、「謀反」の前半生をあいまいにし、「悲劇的な英雄」としての後半生を浮き彫りにしようとした。村上裕紀は、能久親王の敗者としての歴史が、まさにその向心力の所在であると指摘した。それは、親王が

³³ 同前, p.541.

³⁴ 菊地明編『会津藩戊辰戦争日誌』(上)(東京:新人物往来社, 2001.9), p.330, p.340.

³⁵ 注27を参照。

近代において皇族身分を持っている軍人英雄であるだけでなく、敗者から英雄に転身するものだというを意味している。そのため、このような生涯は藩閥と旧幕府両者の向心力を凝縮する機能をもっている。鷗外はこの伝記を執筆した際、親王に投射したこのようなまなざしに気づいたはずであろう³⁶。

末延芳晴は『森鷗外と日清・日露戦争』のなかで、「親王が一時は朝廷に反旗を翻したものの、「東武天皇」を僭称したと指摘した³⁷。と同時に鷗外がこの伝記のなかで、とくに親王の死因について、「親王にとって都合の悪いことや隠すべき事実は落とされたり、書き直されたりしている可能性が高いことも見落としてはならないだろう」「軍神としての親王の生を神話化するために、相当程度の潤色を加えられている可能性が高く」「鷗外は、軍部と日本政府、ひいては明治天皇の意を慮って、曲筆を弄したものと思われる」³⁸とも指摘している。また、中村文雄は『森鷗外と明治国家』のなかで、日清戦争終了後、鷗外は即時に帰国できると期待していたが、野戦衛生官の石黒忠恵に命じられ、直ちに台湾に転戦することとなる。そして、その事実を『徂征日記』に照らし合わせてみれば、鷗外がそのなかで、台湾征战をほとんど言及せず、台湾における職位の位置づけ、ないし責任帰属の不明などについては、石黒との不仲に起因すると思われると指摘した³⁹。以上の先行研究が提起した問題点は、今後、森鷗外の『能久親王事蹟』の視点および史観をより深く探究する手がかりになると思う。

4 おわりに

森鷗外の『能久親王事蹟』が出版されてから約百年後、吉村昭の最後の歴史小説、「輪王寺宮」を主人公にした『彰義隊』は、森鷗外の北白川宮の代表的な伝記『能久親王事蹟』を強烈に意識しながら、「輪王寺宮」と幕末の歴史描写について、「敗者」史観から出発したものだ。そのため、「輪王寺宮」の視点から薩長両藩への感情描写がよりストレートに描かれている。たとえば、「輪王寺宮」が東北諸藩の盟主になったのち、「巨大な武力を背景に朝廷をまるめこみ、江戸城も手中におさめた薩長両藩に対する激しい敵意を抱くようになっていた」⁴⁰などの心境描写はその一例である。

「敗者史観」から考えれば、明治維新以後、薩長両藩等という藩閥政治が主導していた時期に、明治(薩長)政府が征台戦役を利用し、過去の歴史を清算、ないし「周縁者」を排除しようとしたことは、考えられなくもない。征台戦役に臨んだ際、台湾初代総督、樺山資紀をはじめ、薩長両藩出身者が主導する台湾総督府による軍事調度の実際状況を見

36 村上祐紀「『皇族』を書くー『能久親王事蹟』論」(『鷗外研究』88号, 2011.1), pp.52-53.

37 末延芳晴『森鷗外と日清・日露戦争』(東京:平凡社, 2002.12), p.101.

38 同前, pp.100-101.

39 中村文雄『森鷗外と明治国家』(東京:三一書房, 1992.12), pp.121-122.

40 吉村昭『彰義隊』(東京:新潮社, 2010), pp.325-326.

れば、疑問点が多い。また、森鷗外の台湾戦役への参加も例のない異動によるものだったという指摘が、先行研究からわかる。「台湾」戦役が明治(薩長)政府にとって、かつての「政敵」をも含めて「周縁者」を清算するには好都合なものであったと考えるのは、深読みだろうか。

北白川宮が1895年10月28日にマラリアによって台南で亡くなった後、同年11月に日本の新聞にはさっそく社説「能久親王を台湾に奉祀する議」が掲載された⁴¹。翌年、貴族院議会で直ちに国費で台湾神社を建設することが提案された。決議過程において、徳川家達(徳川家)はいち早く賛同したが、唯一の反対者は、侯爵醍醐忠順だった。1868(慶応四)年幕末に、醍醐忠順の嫡子忠敬が東北に送られ、奥羽鎮撫総督府の副総督として奥羽越列藩を討伐した。侯爵はその反対理由を明らかにしなかったが、おそらくかつて敵軍盟主だった北白川宮には感情的なしこりが残っていたのではないかと推測できる。その反対意見に対して、子爵曾我準則が提議案に賛成する演説を発表した。実際には、曾我はかつて薩長藩閥と対立していたため、軍職を辞した者で、北白川宮には好感を抱いていた⁴²。以上のように、台湾神社建設の決議過程をみれば、幕末政争の際、「薩長」と「東北」両集団の対立は、日本が領台したのちにもまだ存在していた。菅浩二は、能久親王が外地へ遠征し、異郷で命を落としたことにたいして、当時の日本社会には「親王がこれから始まる台湾統治の人柱となられたかのやうな」感覚を抱く人が多かったと指摘した⁴³。能久親王が鎮台の神祇になったことは、単に皇族を追悼ないし顕彰するだけでなく、明治維新以後タブーになっている「敗者」の歴史を救済するためにもある。

参考文献

- 歴史讀本編輯部編(2012)『カメラが撮られた会津戊辰戦争』,東京:新人物往来社。
浅見雅男(2011.3)「北白川宮能久親王-明治帝を激怒させたドイツ貴族との婚約」,東京:『文藝春秋』。
菊地明編(2011)『会津藩戊辰戦争日誌』(上),東京:新人物往来社。
村上祐紀(2011)「『皇族』を書く-『能久親王事蹟』論」(『鷗外研究』88号)。
成田龍一(2010)『〈歴史〉はいかに語られるか』,東京:ちくま学芸文庫。
吉村昭(2010)『彰義隊』,東京:新潮社。
長尾宇迦(2010.8)「『東武皇帝』即位事件-最幕末に存在した、歴史に埋もれたもう一人の天皇」(『歴史讀本』,東京:新人物往来社)。
(2010)『皇族軍人傳記集成 第3巻 北白川宮能久親王』,東京:ゆまに書房。
末延芳晴(2002)『森鷗外と日清・日露戦争』,東京:平凡社。
菅浩二(2002)「『台湾の総鎮守』御祭神としての能久親王と開拓三神-官幣大社台湾神社についての基礎的研究-」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第36号)。

41 「能久親王を台湾に奉祀する議」『大阪朝日新聞』(1895(明治28).11.7)。

42 菅浩二「『台湾の総鎮守』御祭神としての能久親王と開拓三神-官幣大社台湾神社についての基礎的研究-」(『明治聖徳記念学会紀要』(復刊第36号)(2002.12), pp.104-106)。

43 同前, p.108。

- 小森陽一(2001)『ポストコロニアル』, 東京: 岩波書店。
- 星亮一(1995)『奥羽越列藩同盟—東日本政府樹立の夢』, 東京: 中央公論社。
- 島田謹二(1995)『華麗島文学志—日本詩人の台湾体験』, 東京: 明治書院。
- 中村文雄(1992)『森鷗外と明治国家』, 東京: 三一書房。
- 森鷗外(1987)『能久親王事蹟』(『鷗外全集』第三卷, 東京: 岩波書店)。
- 西川満(1986)『自傳』, 東京: 人間の星社。
- 黄榮洛(1986)『北白川宮は新竹で死んだ』, 台北: 台湾分館。
- 手塚豊編(1981)『近代日本史の新研究1』, 東京: 北樹出版。
- 鎌田永吉(1967)『いわゆる大政改元をめぐって』(『秋大史学』14号)。
- 武者小路穂(1953)『戊辰役の一資料』(『史学雑誌』第61編8号)。
- 瀧川政次郎(1950.10)『知られざる天皇』, 東京: 『新潮』(47-10)。
- 台湾教育会編(1937)『北白川宮能久親王事蹟』, 台北: 台湾教育會。
- 西川虎次郎(1936.1)『北白川宮能久親王殿下の御征戦に従ひて』(『台湾』)。
- 龜谷天尊・渡部星峯(1933)『北白川宮』, 東京: 吉川弘文館。
- 吉野利喜馬(1923)『北白川宮征台始末』, 台北: 台湾日日新報社。
- 大阪朝日新聞(1895)『能久親王を台湾に奉祀する議』(『大阪朝日新聞』)。
- Dower, John.(2000). *Embracing Defeat*. New York: W.W. Norton & Co Inc.
- 吳佩珍(2007.12)『日本自由民権運動與台湾議會設置請願運動—以蔣渭水(入獄日記)中『西鄉南洲傳』為中心—』(『台湾文學學報』第12期, 国立政治大学)。
- 吳叡人(2006)『「日本」とは何か: 試論『佳人之奇遇』中重層的國/族想像』(黃自進編『近現代日本社會的蛻變』, 台北: 中央研究院亞太區域研究專題中心)。

吳佩珍 Peichen WU

(台湾) 国立政治大学台湾文学研究所。准教授。日本明治、昭和期女性文学、日台植民地期比較文学、文化。『真杉静枝與殖民地台灣』(台北: 聯經出版, 2013.9)、『『サヨンの鐘』神話の解体—真杉静枝「サヨンの鐘」作品群を中心に』『社会文学』第27期(東京: 社会文学研究会, 2008.2)、『The Peripheral Body of Empire: Shakespearean Adaptations and Taiwan's Geopolitics.』*Re-Playing Shakespeare in Asia*.(Poonam Trivedi ed., New York: Routledge, 2010)、『Performing Gender Along the Lesbian Continuum: The Politics of Sexual Identity in the Seito Society』, *Women's Sexualities and masculinities in a Globalizing Asia*. (Saskia E. Wieringa, Evelyn Blackwood, and Abha Bhaiya ed., New York: Palgrave Macmillan Press, 2007)。翻訳書: Faye Yuan Kleeman著『帝國的太陽下: 日本的台灣及南方殖民地文學』(Under an Imperial Sun: Japanese Colonial Literature of Taiwan and the South)(台北: 麥田出版社, 2010)、津島佑子著『太過野蠻的』(あまりに野蛮な)(台北: 印刻出版, 2011)。